

みんなのほくぶつかん みんなぱく

MINPAKU

まもなくお披露目

みんなぱくのキルト・コレクション

大阪府北部を震源とする地震の影響により開催が延期となっておりましたが、企画展「アーミッシュ・キルトを訪ねて——そこに暮らし、そして世界に生きる人びと」は、8月23日から開幕する運びとなりました。本展では、無地の服を着て馬車を駆る北米のキリスト教再洗礼派アーミッシュが作るキルトをとおして、彼らの日々の暮らしや物語、キルトが結ぶ世界との交流を訪ねます。今号では、企画展開幕に先立ち、関連商品をご紹介します。



2019年 国立民族学博物館オリジナルカレンダー

アーミッシュ・キルトを訪ねて

今回の企画展で紹介されるキルトの世界を、カレンダーでたどります。

定価 1,620円 (税込)

国立民族学博物館友の会 会員価格 1,458円 (税込)

サイズ 29.5cm × 29.5cm (開くとタテ 59cm × ヨコ 29.5cm)

オールカラー 28頁中綴じ

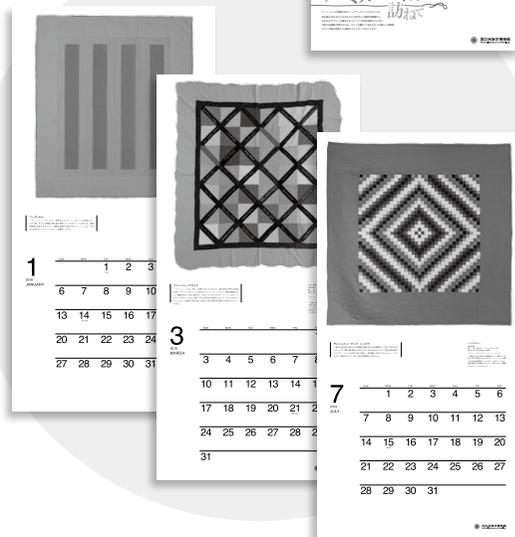
◆5冊以上まとめてご購入の場合は、1冊 1,260円 (税込) です

◆通信販売の場合、別途手数料が必要です

※都合により変更になる場合がありますので予めご了承ください



予約受付中!
8月末日完成予定



※イメージです

絶賛販売中です

アーミッシュ・キルト チケットファイル

定価 400円 (税込)

全4種類

サイズ: 11cm × 23cm (二つ折時)

お問い合わせ

国立民族学博物館ミュージアム・ショップ

TEL: 06-6876-3112 FAX: 06-6878-8421 e-mail: contact@senri-f.or.jp 水曜日定休

オンラインショップ「World Wide Bazaar」

<http://www.senri-f.or.jp/shop/>

ミュージアム・ショップでは関連商品を販売しております。

本館臨時休館にともない店舗は休業しておりますが、オンライン・ミュージアム・ショップ「World Wide Bazaar」は営業しております。

首飾りの微笑み

特別展「太陽の塔からみんぱくへ——七〇年万博収集資料」の図録の撮影のためにみんぱくに何日か通った。一九六八年から約一年間に世界中から集められた膨大な民族資料のうち、撮影したのはひと握りであったが、なかなか楽しい仕事であった。二十代の頃に暮らしたヒマラヤ地方の「ラマ教」の祭りで使われる三つ目のヤクの仮面や、最近よく行く台湾の道教の廟などに祀られている神像、子供の頃に身近で見かけた木製の脱穀機や鋤や箕など、私にとってもなじみ深いものも多くあった。なかにはお土産物や模造品と思えるものもあったが、そういうものもある意味六〇年代末という時代を知る資料といえることができるのだろう。

とはいえ、実際に使用されていたものは、もの自体が力をもつ。仮面であっても神像であっても日用品であってもそれを造って、使った人たちの意識や無意識的な何かが、ものなかに染み込み、時間の経過とともに発酵して、ある種のエネルギーを発するようになる。それを多かれ少なかれ感じながら撮影を続けた。

なかでも、ニューギニアのセピック河流域で収集されたという高さ九〇センチ程の木彫が出てきたときにはいささか衝撃をうけた。精霊小屋の入口に飾られる祖先像だという。この像が現地で実際に

六田 知弘

プロフィール
1956年奈良県生まれ。写真家、1982年よりヒマラヤのシェルバ族の村に暮らして撮影し、「ひかりの素足——シェルバ」として発表。以降、「自然や宇宙と人間との根源的なつながり」を探りながら仏像や遺跡、壁、石水、人、古美術品などさまざまな事象を対象に撮影し、多くの写真展や写真集を通じて発表している。

に使用されたものかどうかは不明だが、明らかに我々とは違う死生観、世界観をもった人たちが造った造形である。頭上に載せられた大きな嘴をもつ鳥、男根のようにも見える股間に表わされた太い蛇。大きく見開いた左右非対称の目、そしてニヤリと笑う口元。不気味さとともに何か底知れぬ根源的なパワーを強く感じた。これを最初に見たときの岡本太郎の顔を見てみたかった。

先日、とある青空市でひとつの首飾りを見つけた。ペンダントヘッドは高さ八センチ、幅五センチ位の楕円形の骨製らしき盤に目鼻が彫ってあり摩訶不思議な笑みを浮かべている。醸し出す雰囲気はあの祖先像とそっくりなのだ。首飾りはミャンマーとインドの国境を跨いで住むナガという少数民族のもので、数十年前までは首飾りの風習が残っていて、男は首を狩ることによって一人前と見なされ、その証としてこうした人面が彫られた首飾りを身につける。それによって男に幸福がもたらされると考えられていたという。

首飾りをしていただた人達と、文明社会に生きる我々と、さて、どちらが幸福なのか、そんなことはわからない。と、掌にのせた首飾りの微笑み(?)を眺めて思う。

月刊 みんぱく

8月号目次

- | | |
|---|---|
| <p>1 エッセイ 千字文
首飾りの微笑み
六田 知弘</p> <p>特集 デジタルライブラリ DiPLAS</p> <p>2 写真が築くグローバル・ネットワーク
飯田 卓</p> <p>4 技術支援について
——写真のデジタル化とデータベースの構築
丸川 雄三</p> <p>5 アフリカの「森の民」と写真記録
市川 光雄</p> <p>7 アラビア半島オアシス生活の半世紀
——片倉もとこ「アラブ社会」コレクション
縄田 浩志</p> <p>8 世界文化遺産ナンマトル遺跡と画像資料の活用
片岡 修</p> | <p>10 ○○してみました世界のフィールド
シェルバの村とトレッキング観光
古川 不可知</p> <p>12 みんぱく Information</p> <p>14 想像界の生物相
アジアを翔た鳳凰たち
松浦 史子</p> <p>16 新世紀ミュージアム
サウジアラビア国立博物館
菅瀬 晶子</p> <p>18 シネ倶楽部 M
中国における環境と民族のゆくえ
——「僕たちの家に帰ろう」
小長谷 有紀</p> <p>20 ながなんちゃ
スラブヤー
呉屋 淳子</p> <p>21 次号予告・編集後記</p> |
|---|---|



TOP 事業の概要 プロジェクトメンバー イベント 公募プロジェクトの募集 採択された公募プロジェクト お問い合わせ

DIPLAS公式サイトのトップページ。写真は、1955年にアフガニスタンで梅村忠夫が撮影したものと

DIPLAS

ディプラス

写真はものごとの記録ツールのひとつであり、人類学・民族学の分野でも欠かせないものである。しかし、研究者がフィールドで撮影した写真は、その希少性、圧倒的な情報量にもかかわらず、可能性を生かしきれているといえない。本特集では、写真をめぐる本館最新の取り組みであるDIPLASを紹介する。

写真が築く グローバル・ネットワーク

飯田 卓いだけたく 民博 学術資源研究開発センター



5月19日に開かれたシンポジウムのようす

国立民族学博物館（みんぱく）のミッションのひとつは、標本資料や映像音響資料を集積し、学術的な利用をうながすことである。当然、設立当時から、写真の学術的利用を進めるプランはあった。しかし、学術写真がこんなにも膨大になるとは、設立当時に誰が予想しただろうか。

個人の所蔵する写真は等比級数的に年々増えており、それは学術写真も同じことである。撮影者の退職や転居にともない、写真の置き場がなくなるのをきっかけとして、貴重な学術資料が大量に廃棄されつつあるという。これを「終活」と自嘲気味によぶ研究者もいるようだが、共有財産になるべき貴重な資料であれば、笑いごとでは済まされない。

支援の内容とその効果

デジタルライブラリの支援は、現在のところ、科学研究費補助金（科研費）を得て研究を進める人々だけを対象としている。二〇一六年度には五件の科研費プロジェクトが、二〇一七年度には八件の科研費プロジェクトが、デジタルライブラリの支援を受けて関連写真の整理を進めた。この原稿を書いている段階では、二〇一八年度の支援案件はまだ募集中だが、刊行時には審査が終わって支援が始まっているはずだ。

みんぱくは、科研費代表者から写真を預かって、それを一種のデータベースに仕立てあげる。それは、科研費代表者がテキスト情報を入力していくための、一種のインターフェイスだ。ただ、写真を整理する目的は科研費代表者によってさまざまなので、みんぱくは科研費の目的や代表者の希望などを考慮して、データベースのひな型をカスタマイズする。また、写真をデジタル化したりサーバーに複製を格納したりしても著作権法に抵触しないよう、整理対象となる写真の撮影者（多くの場合は科研費代表者だが、それと異なる場合もある）と著作物利用の覚書を交わす。著作権を全面的に譲ってもらうことも少なくない。

このように、データベースができるまでにさまざまな作業があるのだが、それで支援が完了するわけではなく、その後につまぐ情報入力が進んでいるかどうかもフォローアップしている。二〇一八年五月二十九日にデジタルライブラリが主催となって東京で開いたシンポジウム「デジタル写真データベースが拓く学術活動の未来」では、情報入力をしやすくするための提案が科研費代表者の側から寄せられた。これらは、今後の支援に反映される予定である。

整理を終えた写真は、ほぼ完ぺきな情報をそなえた、学術的価値の高いものである。順次公開されていけば、全世界をカバーするものとなる。また、一部の科研費代表者は、整理対象となる写真をつづじて、国境をまたいだ対話をおこなっている（縄田氏の記事を参照）。デジタルライブラリのデータベースは、写真整理の道具から、グローバルな関係構築の道具へと脱皮していく途上にある。

しかし、写真は、引き取る側にとつては厄介な資料である。いつ、どこで誰が、どのような状況で撮ったかわからなければ、写真の価値も判断できないからである。つまり、崇高な学術活動にかかわる写真だからといって自動的に価値を帯びるわけではない。その写真がなんであるかを示すテキスト情報が付加されてはじめて、価値が出てくる。これは、市販されている学術書がそれ自体で価値をもつと大きく異なる。学術書であれば、著者がどのような状況でその本を書いたかがなかに述べられているだろうし、どのような価値をもつかも書いてあるかもしれない。写真にも同じような情報を付加していかなければ、真の意味での学術写真とはよべないのだ。われわれが進めるプロジェクトは、こうしたテキスト情報を研究者自身が付加していけるよう、みんぱくが支援するという趣旨で始まった。プロジェクト名は日本語で地域研究画像デジタルライブラリ（Digital Picture Library for Area Studies）、略称でDIPLASとよばれている。ほんとうは「科学研究費助成事業」から始まるもっと長い正式名称があるのだが、それを知りたいかたは公式サイトをご覧ください（<http://dipl.as>）。本事業は、文部科学省からの助成を得て二〇一六年度から始まり、三年めの今年度が最終年度となるが、みんぱくの目玉事業として認められれば来年度以降も継続するかもしれない。

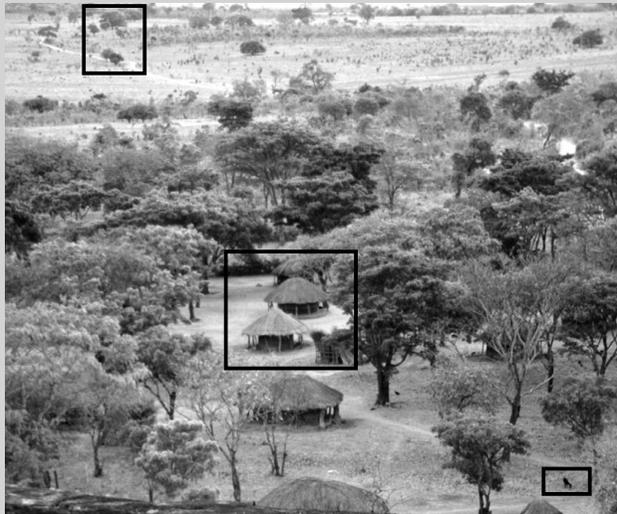


市川光雄氏が撮影した写真をもとに製作された「熱帯アフリカの森と人」データベースの一部

技術支援について ——写真のデジタル化とデータベースの構築

丸川雄三

民博 人類基礎理論研究部



ザンビア東部カズィケ村(撮影：吉田憲司、1994年)
村の家畜(黒ヤギ)や家々のつくり、遠くにのびる道と木々の様子など、写真を高精細でデジタル化することにより、多様な情報を読みとることができるようになる(デジタルデータ作成協力：株式会社IMAGICAウェスト)

DIPLASのデータベース構築は、科研代表者から預かった貴重な写真をデジタル化するところから始まる。ひとつのコレクションについて五〇〇〇コマ程度の写真が対象となるが、多くはスライドフィルムであり、専用のフォルダに納められている。この写真にひとコマずつ番号を振り、収納されていた場所がわかるようフォルダと対応つける整理作業をおこなう。資料整理が完了したのちに写真のデジタル化を進める。

デジタルカメラ全盛の昨今において、業務用のフィルムスキャナの入手も難しくなってきた。そこでデジタル化にあたっては、従来の機器を保有している専門会社に依頼する他に、あらたな方式を導入するなどの工夫をしている。なかでもデジタル一眼レフカメラでスライドフィル

ムを直接撮影する方式は有望である。現在、投影機を組み合わせた製品SlideSnapを活用した手法などを磨いているところである。

いずれの方法でも、デジタル化された画像の解像度は一二〇〇万画素を超える高精細なものであり、写真の背景に小さく写り込んでいる動物の姿や、集合写真の人物一人一人の表情など、原資料に残る情報を余さずに記録することが可能である。スライドフォルダに書かれた撮影地や撮影場所、調査名といった文字情報とともに、データベースで写真をしっかりと閲覧できるようにすることが技術支援の目標となる。後世に残る貴重なデジタルアーカイブづくりを支えるためにも、各々の技術要素の改善を進めたい。

アフリカの「森の民」と写真記録

市川光雄

京都大学名誉教授

アフリカ調査

アフリカを訪れるようになってからそろそろ半世紀近くになる。最初の調査地はザイル(現在のコンゴ民主共和国)のイトウリの森で、「森の民」として知られる狩猟採集民ムブティのところに向かった。見るものすべてがめずらしく、とりわけ熱帯雨林の景観と人びとの生活に圧倒されてたくさん写真を撮った。それ以来、一九九一年に政情が悪化するまで何度も調査地を

訪れた。ザイルの政情悪化後は隣国のコンゴ共和国に渡り、北部の森に住むアカの調査にあたった。二年後にコンゴで内戦が始まると、さらに西側に移動し、コンゴ盆地の西端、カメルーン東南部の森でバカの社会に入った。以後、毎年のようにカメルーンを訪れている。

写真記録の意義

約半世紀のあいだに撮影した写真は、デジタル画像を含めたら一

万点近くになると思う。そのなかには、現在では見られなくなった生活や文化の写真があり、それらに変色したり、カビが生える前に整理・保存せねばと強く感じていた。幸い、みんなばくで画像データベース化のプロジェクトDIPLASが始まったというこ



象狩りの準備。大きな穂先を剃刀のように鋭く研いで、至近距離から下腹部を刺す(イトウリの森、1974年)

生活・環境に見られる変化の記録

長期にわたって撮影された写真資料は変化の記録となり、歴史資料としても重要である。変化のなかでまず目に付くのが着衣や住居等の物質文化や景観の変化である。一九七〇年代には、まだ伝統的な樹皮布をつけた人もいたが、一九八〇年代になると、ほとんどの人が外来の衣服や布地を着るようになった。半定住村では泥壁造りの堅牢な住居が建てられるようになった。野生動物の減少や自然保護計画の影響で大型獣対象の槍猟が衰退し、罾猟や銃猟が主体となった。こうした変化の背景には、換金作物栽培の浸透や砂金採取の自由化、獣肉交易の活発化、そしてあらたな経済機会を求めての外部からの

とで、それに便乗してこれまでの写真資料のデジタル化と整理・保存に着手することになった。フィールドワークの記録としては、フィールドノートのほかに、写真や映像、動植物の標本類や音声テープ、物質文化の資料などがある。なかでも写真資料はコンパクトな形状のなかに、当時目にした(はずの)景観や文化的事象が記録として残されている。撮影時には意図しなかったものが写っていることも多く、当時の状況を知るうえで貴重な記録となる。急激な社会変化のなかで独自の文化を失いつつある「森の民」にとっては、文化保全の意味からも重要である。

人口移入といった地域経済の変化がある。何より大きな影響を与えたのは大規模な伐採事業である。「森の民」の生活の場であり、独自の文化を育んだ森は分断され、残された森も自然保護の対象となって立ち入りが制限されるようになった。



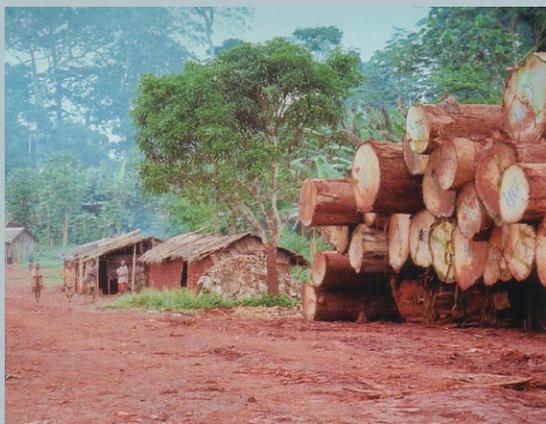
独立後の内乱では反乱軍の支配地域になったが、1974年の調査時には平穏になっていたイトゥリ南部のムブティのキャンプ



流行のファッションをまとったムブティの若者。森のなかでは木立に引っかかる衣服は無用だが、村に出るときは流行の衣服を着る。砂金採集や獣肉交易による収入で購入したもの(イトゥリの森、1985年)

先住民運動の高まりと文化保全

まもなくして、開発と保護の板挟みにあった「森の民」から抗議の声があがった。「先住民族の権利に関する国際連合宣言」(二〇〇七年)などの影響もあり、二〇〇〇年代には中央アフリカでも先住民の生活・文化の保全に対する関心が高まった。それまで各地で分散して暮らしていた「森の民」が相互のネットワークを形成し、土地や森林資源に対する権利を主張するようになった。「森の民」自身による在来の知識や技術の継承、画像や映像を用いた文化保全の活動も始まった。観光を介しての収入の確保と文化の



上：伐採が進むカメルーンの森。カメルーンでは1990年代以降、急速に大規模伐採が進み、2000年代にはバカの居住地周辺まで伐採の対象になった(2002年)
左：ムブティの赤ちゃん。まさに「森の子ども」だが、どんな大人になっているだろうか(イトゥリの森、1975年)

継承も、この地域ではあらたな試みとして注目されている。
写真記録のデータベース化は文化保全の一助となる。DIPLASのプロジェクトをとおして、こうした「森の民」の文化への関心に少しでも貢献できればと思っている。



アラビア半島オアシス生活の半世紀 ——片倉もとこ「アラブ社会」コレクション

なわた ひろし
縄田 浩志
秋田大学教授
片倉もとこ記念沙漠文化財団代表理事
民博特別客員教員

片倉もとこ(民博名誉教授、一九三七〜二〇三一年)は、アラブ・ムスリム社会で広く現地調査を実施し、中東における人文地理学的・文化人類学的研究を切り拓いた先駆者の一人であった。一九六〇年代後半よりサウジアラビア西部のオアシス、ワーディ・ファアティマにて実施した住み込み調査の資料には、オアシスの植生や河川といった自然景観、衣食住や生業といった日常生活をとりまく生活景観にかかわる写真・地図・スケッチがある。これらの写真は現在、「片

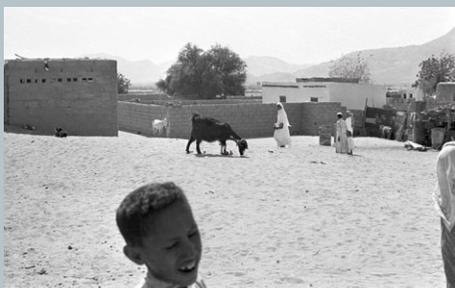
倉もとこ『アラブ社会』コレクション」としてDIPLASで整理・登録作業が進められている。今年五月に同地を訪れたわたしは、これらの写真資料を参照しつつ、過去と現在の状況を比較できる糸口を探した。

自然景観と水・土地利用の変化を追う

景観の写真数百点を村人に見せたところ、場所が同定できたものがある。登録番号KM3308(表紙右上の写真)とKM3306の写真は、アルハイ



上：オアシスの恵み、沙漠のなかの泉で子どもたちが水浴びをしている(KM3306、撮影：片倉もとこ、1970年)
下：今はもう泉の水は湧いていなかった(撮影：遠藤仁、2018年)



上：当時、アリー少年はたまたまとおりかかったのだろうか(KM3234、撮影：片倉もとこ、1970年)
下：当時と同じように、ちょっと首をかしげたポーズをとってくれた(撮影：遠藤仁、2018年)

フの泉の写真ではないかと言う。しかし、村人とともに行って見たが、水はまったくなく、水路の石組みがかるうじて残されているのみであった。泉から水はもう湧き出ていなかったのである。このように写真の撮影場所を同定したのち、同じフレームで再度撮影、位置情報を取得して衛星画像分析をおこない、すでに著書や論文として発表された内容と照合させていく。こうすることで半世紀前と現在の水・土地利用の状況を比較することが可能となった。

一枚の写真がとりもつ縁

写真がもつ価値は、学術的な側面にとどまらず、社会的な点にもおよぶ。

調査の過程で、うれしい出会いがあった。建物を中心として村の様子を撮影した写真(KM3234)に、子どものころの自分が写り込んでいると名乗り出てくれた村人がいた。アリーさんは写真を感慨深げに眺めて、「この場所を案内してあげよう」と言う。これは自分が子

どものころ住んでいたダフ・ゼイニー地区の家のすぐ近くのことだ。

村は様変わりしていた。当時の家屋はとり壊されたり大幅な増築がほどこされて、面影をほとんど残していなかった。それでも、この辺りは広場であったとか、この建物はその後建築されたものであるといった情報をアリーさんから得て、撮影場所も特定することができた。「五〇年後のアリーさんも一緒に写真を撮ってもよいか」とお願いすると、笑顔で快諾してくれた。アリーさんとお会い、あらたな関係を築き上げることができたのは、半世紀前の一枚の写真がとりもつてくれた縁だと感じる。アリーさんは言った、「この写真を次回来たときにでも、わたしに出来ないか」と。当然の申し出である。もちろん「そつさせてもらいます」と即答した。

公開に向けた課題

イスラーム社会では一般的に成人女性の写真を家族以外に公開することは認められない。特に人物特定が可能な画像に関しては注意が必要だ。片倉もこのように述べていた。「彼女たちのわたしへの信頼と好感のほうを大事にすべきだということは、はっきりしていた。『あなたたちの想い出に、わたしだけがみるのだから』といって撮らしてもらった写真は、約束を守って人にはみせていけない」「荒野に生きる女たち」季刊民族学」二八号）。

しかしおよそ半世紀が経った現在、あらたに村の人びととの関係が深まり、被写体となった人物が特定され、本人もしくはその関係者の許可を得ることができれば、公開に踏み切ることができると考えている。調査資料の扱いに詳し

い現地の専門家に協力をおおぎ、デジタル画像の共有化と情報交換の実現を目指している。

DiPLASは、写真一枚一枚について公開の条件として六つのカテゴリもしくはレベルを設けたデータベースである。例えば、成人女性が写り込んでいるか、個人が特定されるか等の基準によって、写真へのアクセスを一定の関係者のみに制限できる。登録して学術情報を付与しつつも現時点では一般公開はいったん控えるといった対応も可能である。このような利点を最大限に活かしつつ、本コレクションは来年度、民博と横浜ユーラシア文化館共催の展示で公開予定である。物質文化と対応させながら、半世紀におよぶ沙漠環境、社会構造、特にムスリム女性たちの生活の変化に焦点をあてて、写真資料の学術的かつ社会的価値をつまびらかにしていきたい。

世界文化遺産ナンマトル遺跡と画像資料の活用

筆者は、一九七九年から約四〇年にわたりミクロネシア考古学の研究に従事してきた。そのため、記録してきた画像資料は二万枚を優に超えている。デジタルによる記録媒体の出現以前

の主流はネガとポジで、他者との画像資料の共有と活用は容易ではなかった。その意味で、デジタル画像を集積したDiPLASが画像資料の国際的な共有、多目的な利用と活用の実現、研究

領域の拡大を可能にした意義はたいへん大きい。ここでは、ミクロネシア連邦のポーンペイ島に所在するナンマトル遺跡のデジタル画像の活用の一端を紹介したい。

ミクロネシア考古学と画像資料

過去の文化や社会を理解する考古学は、発掘調査で発見された遺構（建物跡や埋葬施設）や出土した遺物（土器や石器、貝製品）を基礎資料に、研究を展開している。また、ミクロネシアの島々では伝統文化や口頭伝承が継承されており、考古資料の理解に参考となる情報収集のための民族調査も一連のフィールドワークとなっている。その際、フィールドノートはいうまでもなく、静止画や状況によっては動画で詳細な記録がお



酋長が眠るナンマトル遺跡の人工島、ナントフス島の柱状玄武岩の外周壁（2014年）

こなわれる。特に、グアム島やサイパン島でのホテルや道路の建設に伴う緊急発掘調査では、調査後に消滅する遺跡が少なくないため、画像記録は不可欠である。しかし、研究の基礎資料となる政府関係機関に提出される調査報告書の掲載画像はほんの一部で、他者の研究目的を充足するものではない。したがって、画像資料の共有を可能にしているDiPLASは、研究資料の補完と研究領域の拡充に重要な役割を担っており、ミクロネシアでは初めての試みとなっている。

ナンマトル遺跡とデジタル画像の活用

一〇〇の人工島から成るナンマトル遺跡は、二〇一六年七月に「世界文化遺産」と同時に、「危機遺産」の登録が決定した。筆者はナンマトル遺跡の考古学研究に従事してきた者として、遺跡の保護と周辺環境の保全、研究成果や情報の社会への還元、より多くの方々に遺跡を理解していただくための啓発活動など諸々の活動に努めている。これらの活動は、目的に合わせたデジタル画像の効果的かつ有効的な利用と活用を支えられている。

一九八四年から三十余年にわたりナンマトル遺跡の研究に従事してきた結果、蓄積された画像資料は膨大なものとなった。調査風景だけでなく、遺構の保存状態、人工島内の植物繁殖状況、人工島間の水路のマンングローブの繁茂状況など、撮影時の遺跡の現状を示す画像も多く含まれている。長期にわたる定点観測的な画像は、



ナンマトル遺跡南西角に築かれた、バーンウィ島の巨大玄武岩の石積み（2011年）

可能な遺跡保護と環境保全、「危機遺産」からの脱却を具現化する重要な基礎資料となっている。

画像資料を活用した二〇一七年の啓発活動と研究成果として、奈良と東京で開催した写真パネル展、文化遺産国際協力コンソーシアム研究会と東南アジア考古学会での遺跡の紹介、二四六枚の写真を掲載した現状調査の成果報告書をあげることができる。

以上のように、誰もがアクセス可能なDiPLASが提供する考古学における画像資料は、画像資料の公開としての社会貢献、国際的な共有による研究の拡充、異なる分野の専門家の情報共有をとおりおこなわれる遺跡保護・環境保全活動など、さまざまな可能性を秘めている。

片岡 修 上智大学客員教授

〇〇してみました世界のフィールド

シェルパの村とトレッキング観光

ふるかわ ふかち
古川不可知
民博 機関研究員



ヒマラヤのロッジで働いてみました
村の家族と筆者 (2016年)

エベレスト登山者のサポート役として有名なシェルパ族。筆者はシェルパの家族が営むロッジに「息子」として飛び込んだ。彼らと寝食をともにすることで見えてきた、現地の人びとの暮らしぶりを紹介する。

ネパールと聞いてまず思い浮かべるのは、エベレストとヒマラヤ、そしてトレッキングといったところであろう。観光シーズンにあたる春と秋の乾季になると、欧米や東アジアを中心に世界各地から登山客やトレッキング客がこの国にやってくる。彼らはガイドに連れられて山道を行き交い、ロッジに改装されたルート沿いの民家は英語の看板を掲げて観光客を迎え入れる。

シェルパの村とロッジの仕事

わたしはエベレストの登山口まで歩いて三日ほどの位置にあるシェルパ族の村、ポルツェを拠点に調査をおこなっていた。主要なトレッキング・ルートからは少し離れたこの村は、近隣の村に比べると観光地化は進んでいないが、それでも村内には一〇軒ほどのロッジが建てられている。



ポルツェ村の様子 (2013年)

わたしが居候していたのはそのロッジのひとつであった。ご主人が病気で亡くなってからは、奥さんと、交代で村に帰ってくる二十代の息子二人によって経営されている。全一〇室ほどの小さなロッジではあるものの、シーズン中には満室となる日もあり、夕刻には部屋の準備や食事の支度で大騒ぎである。

給仕をしたり、ときには簡単な料理をするなどして仕事を手伝っていた。ロッジを切り盛りする「母親」は、英語は片言でネパール語も読み書きができないため、特にガイドを連れられない外国人グループがやってくると注文をとりに行くようわたしに言う。シェルパと日本人は風貌や体格が似ているので、何食わぬ顔をしていけば気づかれないことも多い。「君はシェルパなの?」と聞かれたときには「日本人だけどこの息子なんだ」と答え、お客さんの怪訝(けげん)そうな顔を密かに面白がっていた。

信頼と駆け引きのトレッキング・ビジネス

シェルパがビジネス上手だというのは、ネパールに住む他の民族の人びとがしばしばやっかみ交じりに口にするところである。もともとビジネスといっても、日本の基準からするとやり方はじつに鷹揚(おつよう)だ。料理は注文を受けてから下ごしらえを始めるので一時間近く待たせることもざらだし、お金の計算も大雑把である。というよりも、ほとんどのモノやサービスの値段は、人間関係や交渉、またときにちょっとした騙(だま)し合いによって変動する。



暮らしていたロッジ (2014年) ネパール

例えばある朝、トレッキング客の一人とそのガイドが出発の準備をしていた。わたしは明細を計算してガイドに総額を示す。そのとき客がポケットティッシュを買いたいと言っているので、金額を告げて計算書に書き加えようとすると、ガイドはネパール語で「書くな書くな」と言う。彼は観光客に倍の値段を伝え、わたしにはその半分のみをこっそり手渡した。

すべての客が出発したあとで「母親」にこの話をすると、彼女は笑いながら言う。「ガイドは「四〇ルピー」といった端数のものを客が頼むと、きりよく二五〇ルピーなどと告げて差額を『食べて』しまふ」。また客からだけでなく、ガイドによっては自分で計算書を書き、わざと注文をいくつか書き落として、(ロッジに入る食費を)着服する。あるときなんか、夕食が明細に書かれてなくて(亡くなった)主人が怒った。だから「フリ(わたしのシェルパ名)がいれば、ロッジの人間が注文を書けるから助かる」と言ってくれる。

こう書くトレッキング観光は殺伐とした化かし合いのようだが、ガイドとロッジと観光客はお互いもちつもたれつの関係でうまく回ってゆく。ガイドはロッジや客から抜け目なくマージンをとろうとする一方、客をロッジに連れてくる重要な存在である。ロッジもまた少しでも多くのお金を使わせようとしつつ、なじみのガイドや気に入った客には無料の茶や食事や気前よく歓待する。観光客は何かとうるさく値切る一方で、サービスが気に入ればガイドやロッジに莫大な額のチップをはずむ。最初は彼らの「いい加減さ」に苛立っていたわたしも、いつしかシェルパの「ビジネス」を楽しむようになっていった。



夕食時の歓談 (2016年)



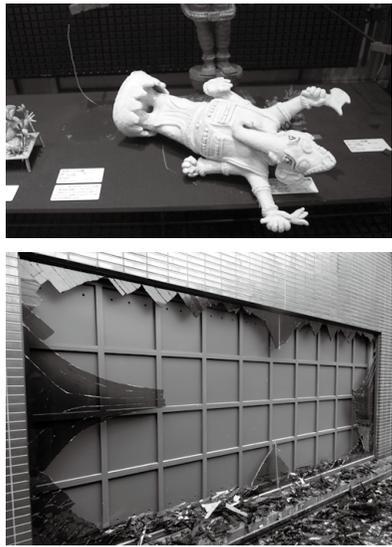
料理中の「母親」 (2016年)



トレッキングをする人びと (2016年)

重要なお知らせ

本館は、6月18日(月)に発生した大阪府北部を震源とする地震の影響により、当分の間、臨時休館いたします。
本館では、教職員、総合研究大学院大学の大学院生、来館者を含め、人的被害はなく、展示物の破損もわずかのもの(計21点)にとどまりました。その一方で、展示場の施設の損傷をはじめ、研究室、図書室における蔵書の落下などの被害が発生しました。現在、早期の展示ならびに図書室の再開を目指して、館員一丸となり、作業を続けております。



上：転倒した資料
下：展示場中庭に面した大面積ガラス割れ



図書室書庫蔵書落下

今後の展示の再開予定は左記のとおりです。

- ・8月23日(木)に、展示場Bブロック(音楽、言語、企画展示場、南アジア、東南アジア)の展示を再開いたします。
- ・9月13日(木)に残りの本館展示場(A、Cブロック)を再開いたします。
- ・図書室は、8月23日(木)に再開いたします。

なお、展示場の一部閉鎖期間中(8月23日(木)～9月11日(火))は観覧料を無料とします。ご迷惑をおかけいたしますが、何とぞご理解の程よろしくお願いいたします。

※特別展「工芸継承——東北発、日本インダストリアルデザイン」の原点と現在は、予定どおり9月13日(木)より開催いたします。

※企画展「アーミッシュ・キルトを訪ねて——そこに暮らし、そして世界に生きる人びと」は、会期を8月23日(木)～12月25日(火)に変更し開催いたします。

- ※8月開催の左記の催し物は中止とさせていただきます。
- ・みんなくゼミナール
- ・みんなく秋の遠足・校外学習事前見学&ガイダンス
- ・みんなくミュージアム・パートナーズ(MMP)
- 「点字体験ワークショップ」

企画展

「アーミッシュ・キルトを訪ねて——そこに暮らし、そして世界に生きる人びと」

無地の服を着て馬車を駆る北米のキリスト教再洗礼派アーミッシュが布の端切れを生かしてつくるキルトは、その鮮やかな色合いや細やかなステッチで人びとを惹きつけています。2011年より収集してきたみんなくコレクションを素材として、キルトに織りこまれた日々の暮らしや物語、キルトが結ぶ世界との交流をたどりま。

会期 8月23日(木)～12月25日(火)
会場 本館企画展示場

■関連イベント
ワークショップ
「PATCHワーク・キルトのある生活」
日時 9月23日(日・祝)

(午前の部)10時30分～12時(10時20分集合)
(午後の部)14時～15時30分(13時50分集合)
講師 黒羽志寿子(キルト作家)
鈴木七美(本館教授)

会場 本館第3セミナー室、企画展示場
対象 小学5年生以上

※要事前申込(応募者多数の場合抽選、定員各20名、参加費500円(別途要展示観覧券))
※申込締切 9月3日(月)

ギャラリートーク
日時 8月20日(木)、9月13日(木)、10月4日(木)、12月23日(木)
各日14時～
講師 鈴木七美(本館教授)
会場 本館企画展示場

※申込不要、要展示観覧券(8月23日開催分は不要)

学術潮流フォーラムII
学術資源開発センター・国際シンポジウム
「ミュージアムの未来——人類的パースペクティブ」
21世紀に入った現在、多くの民族学博物館が、見る者と見られる者のあいだの非対称的な権力関係を脱構築しようとして試みています。このシンポジウムでは、展示にまつわる、見る・見られるという関係を乗りこえて、ミュージアムのあらたな役割を構想します。

日時 9月28日(金)14時～16時30分
会場 グランフロント大阪
北館4階ナレッジシアター(定員350名)
言語 英語・日本語(同時通訳あり)
※要事前申込、参加無料

みんなくSama Sana塾 塾生募集!
知的障がい者の方のための学習ワークショップを開催します。グローバル化が進む現代社会において、知的障がい者の方々も世界の文化や民族、そして多様な生き方や考え方を学ぶことは必要不可欠であると考えています。世界の文化を知ることによって、より楽しく豊かな生活を送っていただきたいと思っています。
対象 中学生以上の知的障がいのある方(療育手帳を保持している方)
活動場所 国立民族学博物館

※参加無料
※参加希望の方は、まずは「みんなくSama Sana塾」へ登録ください。
※ワークショップに参加する塾生には、必ず保護者もしくは介護者の方が付き添ってください。
※受付期間 8月31日(金)まで
※詳しくはみんなくホームページをご覧ください。

みんなくウィークエンド・サロン
研究者(話せ)

本館の研究者が「現在取り組んでいる研究」「調査している地域(国)の最新情報」「みんなく展示資料」について分かりやすくお話しします。

8月26日(日)14時30分～15時30分 本館企画展示場
キルト・ストーリーが紡ぐ世界
話者 鈴木七美(本館教授)
※申込不要、参加無料

※各イベントについてくわしくはみんなくホームページをご覧ください。
※電話でのお問い合わせの受付時間は、9時～17時(土日祝を除く)です。

国立民族学博物館友の会 電話 06-6877-8893 (9時～17時、土日祝を除く) FAX 06-6878-3716
https://www.senri-f.or.jp/minpaku_associates/ E-mail minpakutomo@senri-f.or.jp

友の会

友の会講演会

※会員無料(会員証提示)、一般500円、当日先着順
【会場と日程を変更して実施します】
第479回
日本人のブラジル移住とコーヒー文化の逆流
カフェエパウリスタ真面目店を中心に

講師 中牧弘允(吹田市立博物館長、本館名誉教授)
日時 8月10日(金)13時30分～14時40分
会場 ニフレル3階※当日ニフレル券売所前にて受付
日本人はコーヒー農園の労働者としてブラジルに移住しましたが、ブラジル側はコーヒーを飲む文化を日本に定着させようとした。サンパウロ州政府からコーヒー豆の無償提供を受け、1杯5銭のコーヒーを飲ませるチェーン店カフェエパウリスタが銀座をはじめ各地にオープンしました。その1号店が真面目店にできたこと、しかもその建物が移築され、数年前まで豊中駅前に存在していたという「コーヒー文化の秘史」について語ります。

※終了後、割引料金でニフレルをご見学いただけます(希望者のみ)。ニフレルの小畑洋館長の説明のあと、自由見学となります。受付時に1700円をお支払いください。

第480回
絶滅危惧生物と人の交わり
捕獲、鑑賞、保全を中心に

講師 岸上伸啓(人間文化研究機構理事、本館併任教授)
日時 9月1日(土)13時30分～14時40分
会場 本館第5セミナー室

キラ多種の生き物が絶滅の恐れがあると言われていて、また、最近では、食料として利用されてきたナマコやマグロも生息数が激減し、保全の必要性が叫ばれています。この講演では、世界各地における絶滅危惧生物と人との多様ななかり方を概観した後、北アメリカに生息するホッキョククジラやラッコ、ホッキョクグマを取りあげて、人との関係を歴史的な視点から検討します。
※講演会終了後、講師を囲んで懇談会(40分)をおこないます。

第92回民族学研修の旅

融合と共存の北西インドをゆく
——女神信仰とインド叙事詩の祭礼の期間に訪ねる
日程 10月13日(土)～22日(日)【締切：8月31日(金)】

特別展

「工芸継承——東北発、日本インダストリアルデザイン」の原点と現在」
日本における工芸の近代化、産業化の推進と東北地方の工芸業界の発展に寄与した国立工芸指導所は、まさに日本におけるインダストリアルデザインの原点の一つです。本展では、国立工芸指導所の活動を振り返りつつ、日本の工芸品が、どのように世界に挑戦するのかについて考えます。
会期 9月13日(木)～11月27日(火)
会場 特別展示館



人工木目大皿 (東北歴史博物館蔵)

■関連イベント
研究公演
「東北の復興を願って——夢、希望、想いをこめて」
日時 10月28日(日)13時～16時35分(12時20分開場)
会場 本館講堂予定(定員450名)
※要事前申込、要展示観覧券

ワークショップ
「オリジナル木製スプーンをつくってみよう」
(京都造形芸術大学との共同プロジェクト)
日時 9月22日(土)、29日(土)、10月13日(土)、21日(日)、11月3日(土・祝)、18日(日)
各日11時～15時30分(15時受付終了)

会場 特別展示館2階(定員80名)
対象 子どもから大人まで(未就学児は保護者同伴で参加のこと)
※当日受付(先着順)、要特別展示観覧券
※各日も13時より日高真吾(本館准教授)によるギャラリートークをおこないます。

お問い合わせ(本館 広報係)
電話 06-6878-8560 / FAX 06-6875-0401
http://www.minpaku.ac.jp/



想像界の生物相
 かけ
アジアを翔た鳳凰たち

二松学舎大学准教授 松浦 史子



資料名 鳳
標本番号 H0101032
地域 中国
サイズ 縦 114cm × 横 121cm



資料名 水上人形芝居用操り人形
標本番号 H0201587
地域 ベトナム
サイズ 高さ 60cm × 幅 42cm

◆◆◆ 古代 — 風神から吉祥へ ◆◆◆

中国では、**鳳**（ほう）を**風**（ふう）神という（右頁上）。その**鳳**の図柄として**鳳凰**が多く選ばれているのは、**鳳**を中国語で読むと**鳳**と音に通じるためでもある。そのイメージの連想はふるく、殷の甲骨文にみられる**鳳**神としての**鳳凰**にたどることができ、周代から戦国に至れば、**鳳凰**は、そのころあらわれはじめた祥瑞思想を背景に、吉祥となった。中国最古の神話的地理志『山海経』にも天下に安寧をもたらす**鳳凰**がみられるが、しかし、紀元前の世界では**鳳凰**はまだ祥瑞のメインではない。

◆◆◆ 漢代 — 政治とのかわり ◆◆◆

中国史上、**鳳凰**がもつとも多くあらわれるのは、天子の所業は自然現象に示されるもの、とする天人相関の神秘思想が流行した漢代である。祥瑞が天意のあらわれとなったこの時代、火禽である**鳳凰**は漢王朝の火徳（五行相生説では、漢は火に当たる）の象徴として、特に前漢末あたり（紀元前一世紀ごろ）から多く記録されはじめた。例えば、漢王朝を再興した後漢の光武帝の孫である章帝の御代、その善政をことうほぐ吉祥として二四九羽もの**鳳凰**があら

われた、という記録がみえている。漢帝国四〇〇年をつうじて、**鳳凰**は、このように王朝の正統性を保証する天の使者となった。

◆◆◆ 乱世の凶鳳 ◆◆◆

漢から唐という大帝国内に挟まれた動乱の魏晉南北朝（三―六世紀）にも、王朝の存亡を政治的に象徴するあらたな**鳳凰**があらわれた。そのひとつが、動乱の歴史を合理化するものとして誕生した、凶兆としての四羽の**鳳凰**である。祥瑞の出現は特に王朝革命の根拠として常用されたことから、この手の祥瑞はときの支配者により消し去られたものが少なくない。しかし今、中国周辺部にのみ残される祥瑞情報と結び合わせると、漢以来の統一帝国たる唐にあってなお、この「天下を滅亡に導く四凶鳳」が畏怖の対象とされたことが明らかになる（下図参照。敦煌ペリオ文書・唐抄本『瑞応図』の**鳳凰**の項目は、天下に戦乱や自然災害をもたらすという四凶鳳の記録から始まる）。

◆◆◆ その生態と特徴 ◆◆◆

一般に、**鳳凰**はフェニックスと訳されることが多い。しかし、不死鳥のイメージが強い英語圏のフェニックスと中国の**鳳凰**が

もつとも異なるのは、おそらく政治思想とのかかわりにある。**鳳凰**の原型については、孔雀説・山雉説などさまざまな憶測がなされてきた。しかし南北朝初めの博物学者・郭璞の『山海経図讚』では、**鳳凰**を「八つの象を体とし、五つの徳を紋様とす」と讃えるように、中国の**鳳凰**は八種の鳥獣（鷹・鹿・蛇・魚・龍・亀・燕・鶏）の複合生物であり、五徳（仁・義・礼・智・信）を象徴する、想像上の政治・思想的な生物とするのがただし。中国でのこうした政治思想性と不可分の**鳳凰**のイメージは、漢代にはその支配下にあつたベトナムにもおよんだものと考えられる。しかし今、ベトナムの水劇に用いられる**鳳凰**は、すでに政治性とは無縁の民間的な吉鳥である（右頁下）。



敦煌ペリオ文書・唐抄本『瑞応図』の四凶鳳の図
 （所蔵：Bibliothèque nationale de France）

新世紀ミュージアム

観光産業の発展がめまぐるしい中東地域では、博物館もまた変化を迫られている。最先端技術を活用した博物館も増えていくなか、モノで魅せるという手法をとったサウジアラビア国立博物館を紹介する。



サウジアラビア国立博物館の正面入り口

転換期を迎える中東の博物館

現在、中東の博物館は大きな転換期を迎えている。

その多くが紛争と混乱のなかにある中東地域であるが、ここは本来人類にとって、文明発祥の地のひとつである。有史以来、さまざまな文化遺産がこの地で生み出され、その多くは皮肉にも



反イスラーム的で好ましくないものの事例として展示されている、護符や呪文。他の中東諸国ではありふれている邪視避けの護符も、サウジアラビアではほとんどみかけなかった

じつはつい先日、そのサウジアラビアに出張する機会があり、滞在中いくつかの博物館を訪問した。今回はそのうちの代表格である、首都リヤドの国立博物館を紹介したい。というのも、その展示物のうちいくつかは、すでに日本で公開されているのだ。

今年前半期、東京国立博物館で開催された特別展「アラビアの道——サウジアラビア王国の至宝」をご覧になった方は、一様に瞠目されたのではなからうか。そこで公開された繊細な模様をほどこされた石器や神像、アラビア文字とはまったく異なる言語がしるされた碑文などは、文明とは無縁の荒れた沙漠というアラビア半島のイメージを、完全に覆すものだった。これまで

欧米の博物館に所蔵されることによって、破壊を免れてきた。もちろんエジプト考古学博物館のように、中東にも世界的に知られたコレクションを所蔵するところはあるが、残念ながらアレクサンドリア国立博物館のように、紛争で深刻なダメージを受けた施設もある。内戦から不死鳥のごとき復活を遂げたペイロート国立博物館も含め、これらはいずれも展示物を情報とともに陳列展示する、いわゆる正統派の博物館である。そのいっぽうで、これまでになかったコンセプトを掲げ、プロ

ジェクションマッピングなど最新技術を駆使した新世代の博物館・美術館が近年相次いで開設され、話題となっている。手狭になっていた考古学博物館のコレクションを一部移し、JICAなどの協力のもと、エジプトの通史を展示しようというところみから企画された大エジ



近年サウジアラビアでは、地方文化の多様性が尊重されるようになってきた。「統合」セクションでは、各地域の家屋の原寸大に近いモデルが展示されている

海外ではほとんど知られていなかった、古代のアラビア半島の文化的重層性に焦点を当てた展示が、みんぱくとほぼ同規模のスペースで展開されているといえ、その途方もなさのイメージを思い描いていただけのかもしれない。しかもスペースの半分ほどが、イスラーム以前のアラビア半島で栄えた諸王国の展示であることは、特筆に値する。なぜなら厳格なワッハブ主義を国教とし、かつては地動説すら否定していたこの国では、ほんの一〇年ほど前までは、前イスラームの古代文明など話題にするのはばかられたのである。訪問時、黒いアバーヤとヒジャーブをすっぽりとかぶった女子高生の一団が、ナバテア王国の巨大遺跡マダイン・サーレフ、つまり「古代の異教徒の墳墓」の展示を熱心に観ていたのは、非常に印象的であった。

現在の展示は二〇〇六年以降のものであるというが、この博物館は近年のサウジアラビアの急激な変化を、まさに体現している。加えて、多くの文化遺産が海外に流出しているエジプトやシリアとは異なり、サウジアラビアの国宝級の文化遺産が、ほぼすべてこの国立博物館をはじめとした国内に残されていることも、驚きである。

プト博物館（通称GEM、来年一部開館予定）や、昨年オープンして早くも湾岸観光の目玉と賞されているルーヴル・アブダビなどが、その代表格だ。後者はことに、石油産業への経済的依存から脱却し、観光をあらたな財源としてゆこうとする湾岸産油国の最近の流れに乗って登場したものである。潤沢な資金や技術援助をどう魅力的な展示作りに生かすかが、今後おいに問われてゆくであろうが、おもに紛争地、つまり博物館運営が厳しい地域にばかりかかわってきたわたしは、この動きに複雑な感情を抱かざるをえない。

よみがえる古代文明

この流れに、満を持して加わろうとしているのが、サウジアラビアである。

アイデンティティと愛国心発場の場

近年、サウジアラビアは国を挙げて、サウジ人アイデンティティと王国への忠誠に基づく愛国心を育てることに熱意を注いでいる。宇宙と地球の誕生（！）からサウード家による王国樹立までを一本のタイムラインで語る展示は、あきらかにサウジ人アイデンティティと愛国心発揚を目的としたものであり、やや強引で教育的に過ぎるくらいはある。ただし、最新技術に走ることなく、正統派の展示手法を採りながら、魅力的で洗練された意匠を凝らした国立博物館は、中東の新しい博物館のなかでも出色の存在であることは確かだ。

モノで勝負する、その心意気はみんぱくとも共通するところである。



アラビア半島で栄えた古代文明を紹介する「アラブ諸王国」のセクションで、観客の度肝を抜くロックアート。ただしUNESCOの世界遺産認定にかかわる友人によれば、「切り出さずに現地に置いておくべきもの」であるそうだ



中国における環境と民族のゆくえ

小長谷 有紀

民博 超域フィールド科学研究部

モンゴル遊牧民の生活を描いた映画は二〇〇〇年以降、日本でもしばしば上映されるようになった。中国で制作された映画の場合、モンゴル国の場合と違って、つねに「草原環境の劣化」と「民族文化の喪失」が主題となっている。

例えば「白い馬の季節」(二〇〇五年)では、草原での牧畜生活をあきらめた主人公が最終的に町へと移住する代わりに、馬を野に放つことによって、消えゆく草原と文化がセットで描かれた。また例えば「トゥヤアの結婚」(二〇〇六年)では、女主人公の偽装ともいえるべき離婚と再婚を通じて、草原の牧畜生活をあきらめない不屈の精神が描かれた。これらの映画は、中国とリわけ西北部の乾燥地域においては環境問題がとりもおさず民族問題でもあることを雄弁に物語っていた。

北方遊牧民の現在

二〇一四年、久しぶりに内モンゴル自治区に南接する甘肅省を舞台に、ユグル(裕固)族を主人公として、環境問題と民族問題を扱う映画が届いた。地質学を学び、アメリカでビジネスに成功した中国人プロデューサーによる作品である。民族を超えて、故郷を憂える良心が発揮されている。

ユグル族は、北方遊牧民の興亡史を反映して、テュで、人びとにとって何が問題なのかが一気に噴出してしまふからである。

「都市化」「農耕化」さらには「金の採掘」により草原が劣化し、ラクダを飼うために遠くで放牧しなければならぬ、という設定から始まる。

風景のリアリティ

こうした負の状況が改善する気配は微塵もないまま、スクリーンからは目が離せない。少年たちが無事に草原の我が家にたどり着けるか心配でならない。

愛憎半ばする兄弟はつかず離れずの旅を続ける。六泊七日で想定されているらしく、おおよそ一六〇キロメートルであろうか。道中の風景は現地の問題を具体的に知る良き手がかりとなる。

水が蒸発しないように水路はコンクリートで固められている。ただし、わたし自身も参加した総合地球環境学研究所による調査によれば、同技術を用いて蒸発量を減らすと、かえって降水量も減り、かつ地下水涵養量も減る。天空や大地に漏れてゆく水分が水循環をもたらしてきたのであって、人工的な技術はかえって裏目に出してしまうのだ。

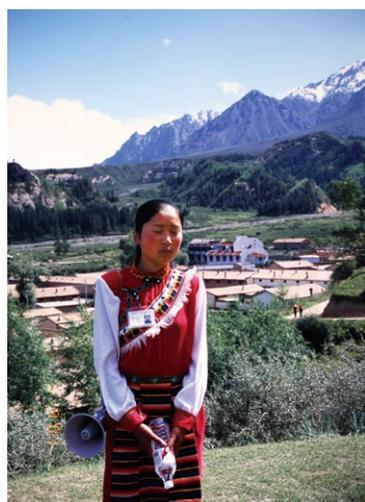
温暖化の影響を受けて乾燥化がさらに進んでいるため、都市部への強制的な移住が勧められており、廃村が目立つ。

ルク語を話す集団とモンゴル語を話す集団を含み、その民族衣装にはチベットの影響も強く見受けられる。八世紀にモンゴル高原にウイグル可汗国を建てたテュルク系遊牧民は、九世紀にキルギス族に追われて祁連山山麓で王国を建てたが、一世紀にはチベット系スタングート族(西夏)に滅ぼされ、さらに一三世紀にはモン

ゴル族の建てた元朝に支配された。こうして、複合的な民族集団が形成され、二〇世紀の識別に至っている。映画の舞台と主人公が変わっても、民族・環境問題は解決していない。それどころか、ますます加速しているように思われる。何しろ、映画が始まるや否や五分以内に、井戸を掘っても水の出ない乾燥しきった草原の風景と、祖父と父のユグル語による会話によつ



種オスが先頭を歩き、自律的に移動しているラクダ群(モンゴル国オブス県、2017年)



馬蹄寺森林公園でユグル族の衣装をつけた係員が説明してくれた(中国甘肅省張掖市肅南裕固族自治県、2001年)

目的地の湿潤な草原にも巨大な工場群の煙突がそそり立つ。じつは、そこは世界遺産の上都付近であり、映画の舞台となっている地域からは遠く二〇〇キロ離れている。が、しかし、もはや草原に遍く存在する景色でもあるだろう。

名脇役のラクダ

こうした風景と同時に、動植物との親密な関係も描かれている。例えば、少年たちは沙棗の枝を折ってグミを食べて飢えをしのごく。ラクダたちは、掛け声に応じて脚を折り、人を乗り降りさせる。野宿の際には布団代わりになり、移動しない昼間は日よけにもなる。道に迷ったら導いてくれ、見失った相棒を捜し出してくれる。こうした自然を友とする暮らしがあればこそ、草原の劣化は切ないのである。

監督によれば、もはやユグル語を話せない子どもたちにセリフを特訓しなければならなかったことに比べれば、ラクダの訓練は楽だったそうだ。



アルタイ山中の夏営地から移動するとき、ラクダにゲルを積む(モンゴル国、1995年)

スラブヤー



What's in a name?

 ごや じゅんこ
 呉屋 淳子

沖縄県立芸術大学准教授

那覇空港から車で三〇分のところに浦添市港川^{うらそえみながわ}という地域がある。そこには、地元の人たちから通称「外人住宅」とよばれているモダンな建物が立ち並んでいる。わたしはこの「外人住宅」で小学生時代までを過ごした。わたしにとってここは思い出深い場所なのである。「外人住宅」とよばれる訳は、かつて沖縄が米軍統治下にあった一九五〇年ごろ、駐留米軍の将校や軍属向けの賃貸住宅として、地元の民間業者によって建てられたからである。

「外人住宅」の主要な建材は、鉄筋コンクリートの柱と梁^{はり}、そしてコンクリートブロックである。屋根には「スラブ」とよばれる平たく引き伸ばされた鉄塊をコンクリートで覆った板が載り、四角い箱型、平屋であることが特徴である。米軍統治下の沖縄の人びとは、この「外人住宅」に憧れ、自分たちも見よう見まねで、コンクリートブロック製の住宅を次々に建てていった。それは、アメリカに対する憎しみと憧れが複雑に絡みあった沖縄の人びとの心情のあらわれといえるかもしれない。現在では、県内における建築物の非木造率は九〇パーセントを超え、といわれるほど、沖縄はコンクリートブロックだらけの島になった。

沖縄の人びとは、こうしたコンクリートブロック製の住宅を「スラブヤー」とよんだ。「ヤー」とは、家屋を意味する。一般的に沖縄の伝統的な住宅といえ、赤瓦を用いた木造建築を思い浮かべるだろう。こうした瓦屋根の住宅は、「カーラーヤ」（瓦屋、瓦屋根の家）とよばれ、廃藩置県以降、那覇をはじめとする都市部

で普及した。現在、赤瓦は「沖縄らしさ」の象徴とされ、県内の公共施設をはじめ、ホテル、コンビニエンスストアなどの建物に使用されている。しかしながら、かつて沖縄本島の大部分を占めていた農村部では、廃藩置県以降も「アナヤ」（穴屋）とよばれる質素な茅葺き屋根の住宅が主流だった。沖縄戦と米軍の占領統治が、沖縄の風景を一変させたのだった。

戦後の沖縄の人びとが見よう見まねで生み出した建築様式は、いってみれば、あり合わせの材料で造り上げた一種のプリコラーージュのようなものである。しかし、「沖縄らしい」赤瓦よりもコンクリートブロックに不思議と愛着が湧くのはなぜだろう。その異形の相貌に魅了された建築家たちがあらわれはじめる。彼らは、コンクリートブロックという沖縄独自の建築材に着目し、それを複雑に組み合わせ、「沖縄構成主義」とよばれる独自の建物群を造り上げている。

コンクリートブロック製のスラブヤーは、現代においても進化し、増殖し続けている。それは、かつてのようにアメリカに対する憎しみと憧れが複雑に絡み合ったものではなく、現代の沖縄に生きる人びとが実感する「沖縄らしさ」の詰まったスラブヤーなのである。



スラブヤーの原型となった「外人住宅」

平成30年6月18日に発生した大阪府北部を震源とする地震により亡くなられました方やそのご家族の皆様、また、平成30年7月豪雨により亡くなられました方やそのご家族の皆様には、つつしんでお悔やみを申し上げますとともに、被災された方々に心よりお見舞い申し上げます。

被災された皆様の生活の一日も早い復旧を心よりお祈りいたします。
(国立民族学博物館長 吉田憲司)

編集後記

前号の編集後記で追記したように、本館は6月18日に発生した大阪府北部を震源とする地震の被害を受けている。現在は臨時休館中であるが、幸いなことに企画展をはじめとするイベントの今後のスケジュールも大幅に変更されながらも、めどが立ちつつある。本号のインフォメーション欄のほか、ホームページ等で最新情報をご確認ください。

本号の特集はみんなぱくで進行中の地域研究画像デジタルライブラリのプロジェクトを取り上げた。プロジェクトの正式名称は何度読んでも覚えられなかったが、いずれも古い写真の整理だけにとどまらない未来に向けた研究の広がりがわかり、今後の展開が楽しみである。このプロジェクトが本館での展示などに発展した際には、あらためて紹介したく考えている。
(丹羽典生)

●表紙：左上から時計回りに

1. 撮影：市川光雄、コンゴ民主共和国イトウリの森、1974年（詳細は5頁参照）
2. 片倉もとこ「アラブ社会」コレクションに登録された写真（KM6138、撮影：片倉もとこ、サウジアラビア、1970年）
3. アガ・トンガン遺跡の発掘風景（撮影：片岡修、グアム島、2015年）
4. 科研代表者から提供されたスライド写真。デジタル化した後にもスライドの位置が変わらないよう気を配る

次号の予告

特集

「受け継がれる用の美」（仮）

みんなぱくをもっと楽しみたい方のために 国立民族学博物館友の会のご案内

友の会は、みんなぱくの活動を支援し、博物館を楽しく積極的に活用するためにつくられました。

毎月『月刊みんなぱく』をお届けするほか、さまざまなサービスをご用意しております。

維持会員・正会員

『月刊みんなぱく』の送付／友の会機関誌『季刊民族学』の送付／本館展示の無料観覧／特別展観覧料の割引／友の会講演会への参加／研究者同行の国内外研修旅行への参加 など

ミュージアム会員

『月刊みんなぱく』の送付／本館展示の無料観覧／特別展観覧料の割引／友の会講演会への参加 など

繰り返し入館できる**みんなぱくフリーパス**や、学校・学部単位で利用できる**キャンパスメンバーズ**など各種会員種別もご紹介します。目的にあわせてご利用ください。

詳細は、一般財団法人千里文化財団までお問い合わせください。
(電話 06-6877-8893 / 平日9:00～17:00)



月刊みんなぱく 2018年8月号

第42巻第8号通巻第491号 2018年8月1日発行

編集・発行 人間文化研究機構 **国立民族学博物館**

〒565-8511 大阪府吹田市千里万博公園 10-1
電話 06-6876-2151

発行人 園田直子

編集委員 丹羽典生（編集長） 寺村裕史 三島禎子

南真木人 山中由里子 吉岡乾

デザイン 宮谷一 長岡綾子

制作・協力 一般財団法人 千里文化財団

印刷 毎日新聞社

*本誌についてのお問い合わせは国立民族学博物館広報係にお願いします。

*本誌掲載記事の無断転載を禁じます。

交通案内

- 大阪モノレール「万博記念公園駅」・「公園東口駅」下車、徒歩約15分。
- 阪急茨木市駅・JR茨木駅から近鉄バスで「日本庭園前」下車、徒歩約13分。
- 乗用車は、公園内の「日本庭園前駐車場」(有料)から徒歩約5分。「日本庭園前ゲート」横にある当館専用通行口をお通りください。
- タクシーは、万博記念公園「日本庭園前駐車場」まで乗り入れてきます。

みんなぱくホームページ

みんなぱくフェイスブック

みんなぱくツイッター

みんなぱくインスタグラム

みんなぱくYouTube

<http://www.minpaku.ac.jp/>

<https://www.facebook.com/MINPAKU.official>

<https://twitter.com/MINPAKUofficial>

<https://www.instagram.com/MINPAKUofficial/>

<https://www.youtube.com/user/MINPAKUofficial>

